

私のこれまでの歩みと、現状描く臨床検査技師としての将来像

浦川 雅貴

熊本大学医学部保健学科 検査技術科専攻 4年

[はじめに]

私は入学後これまで、自身が臨床検査技師として社会に出るということに何の疑いももたず、それ故、臨床検査技師としての将来像について特に深く考えることもなく、3年以上もの学生生活を漫然と送って来た。そんな私にとって、今回この発表の場をいただいたことは、自身の将来と真剣に向き合う、本当に良い機会となった。従って、ここに感謝の気持ちを込めて、現状私が描く臨床検査技師としての将来像、ならびにそこに至るまでの私の取り組みや心境の変化について述べていく。

[大学入学まで]

今振り返ってみれば、大学入試の際、私が熊本大学医学部保健学科検査技術科専攻学部を志望校に定めた動機は、決して胸を張れるほどのものではなかった。身近な存在だった祖父の死をきっかけに、漠然と医療従事者としての自身の将来を思い描いてはいたものの、「何故、数ある医療職の中で臨床検査技師を選択するのか?」という問いかけに、きちんと回答できる知識も信念もなければ、医療従事者としての使命に燃えるわけでもない、いわば受験生として当時最もテクニカルにフィットした場所を志望校に選んだに過ぎない、現代によくいる高校生の一人であったように思う。

[大学入学後現在まで]

入学後も、長く臨床検査技師としての将来像を十分描き得ない自分がいた。それでも、学年が進み、講義や実習が進む中で、「機械化が進む臨床検査業界の中においても、あくまで「人」が携わらなければ成り立たない業務とは何か」という視点から至った私の最終目標は、「病理を専門とする臨床検査技師になること」となった。

[現状描く臨床検査技師としての将来像]

私自身が将来、病理学を専門とする臨床検査技師の一人に成長するためには、単に臨床検査技師としての技術的側面を充実させるだけでなく、「医療従事者とし

ての確固たる使命感」や「検査業界全体の将来を見抜く力」、そして「後進の指導にもつながる確かな医科学の知識」兼ね備えることができるようにならなければいけないと、最近特に強く感じるようになった。その目標に向かうためには、先輩方の教えのもと、自らの努力も怠らず細胞検査士資格や病理の一般検査技師取得を目指す一方で、絶えず臨床を足場に、検査室を含めた医療現場の現状・問題点を知り、患者・一般市民のニーズやその変化に敏感になること、そして社会人大学院進学も視野に入れた医科学への本格的取り組みを継続していくことが必要と考えている。患者から学び、現場・先輩たちから学び、さらには優れた病理学の研究者に師事することで、自身を成長させ、一医療従事者として社会に貢献できる人材となっていきたい。